

秘

滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況ト移住鮮人

昭和三年七月調製

參謀本部

0437

例
言

本書ハ先ニ當部第六課ニ於テ各民族ニ就キ別個ニ調査セシモノヲ茲ニ一括編纂セルモノニシテ内容ニ精粗、新舊アリ隔靴搔痒ノ感無キ能ハサルモ將來ニ於ケル滿蒙問題研究ノ參考資料ト認メ印刷配布ス

0438

滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況ト移住鮮人

目次

緒言	一頁
第一篇 滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況	四
第一章 諸民族滿洲侵入ノ沿革	四
第一節 滿洲ノ封禁	四
第二節 漢人ノ入滿	七
第三節 朝鮮人ノ滿洲侵入	九
第四節 露國ノ南下	一一
第五節 日本ノ進出	一三
第二章 滿洲ニ於ケル滿洲人ノ現状	一五
第三章 鮮人及漢人渡滿ノ趨勢	二四
第四章 滿洲ニ於ケル露西亞人	三一

0439

第五章 滿蒙在住本邦人情況	三五
第二篇 滿洲ニ於ケル我移住鮮人	五九
第一章 概説	五九
第一節 鮮人ノ分布ト水田事業	五九
第二節 鮮人ノ生活狀態	六一
第三節 土地入手ト商租問題	六二
第四節 鮮人保護ノ狀態	六三
第二章 各論	六六
第一節 南滿ニ於ケル狀態	六六
一 分布ノ情況	六六
二 水田經營ノ情況	七三
三 生活狀態	七五
四 自治機關	七七
五 教育機關、救恤機關	七八
六 課税	八〇

0440

第二節 北滿ニ於ケル状態	八二
一 分布ノ状態	八二
二 生活状態	八三
三 自治機關	八五
四 支那人ノ對鮮人觀念	八五
五 我官憲ノ保護政策	八六
第三節 間島ニ於ケル情况	八七
一 分布ノ状態	八七
二 農業	八九
三 教育ノ情况	九〇
四 生活状態	九一
五 土地ノ入手及小作	九一
第四節 其他ノ地方ニ在ル鮮人	九三
一 熱河管内ノ鮮人	九三
二 通遼附近ノ鮮人	九四

三

0441

三	露領「グロデコウオ」附近ノ鮮人	九四
五	節 駐支不良分子ノ情況	九六
六	節 支那人側鮮人壓迫ノ近況(附錄參照)	九八
一	官憲ノ壓迫	九八
二	一般支那人ノ壓迫	一〇〇
七	節 土地商租問題	一〇〇
三	章 結 言	一〇六
附表		
一	南滿方面保民會其他親日團體表	
二	南滿方面鮮人教育機關	
三	南滿方面移住鮮人救恤機關	
附圖		
一	滿洲一帯移住鮮人分布圖	
二	鮮人經營水田分布圖	
三	閩島方面鮮人分布要圖	

0442

附 録

最近ニ於ケル支那官憲ノ不法行爲竝鮮人壓迫ノ實例

一〇九

0443

五

滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況ト移住鮮人

緒言

或ル人ハ云ツタ

漢人ノ侵蝕力ハ強烈テ而モ其形式ハ極メテ靜穩ナル彼等ハ恰モ白蟻ノソレノ如ク何人モ十分ノ注意ヲ拂ハサル間ニ早クモ高塔ノ石壁ヲスラ嚙ミ壞フルノテアツタ

ト滿洲ニ於ケル漢人ノ侵蝕ハ明ニソレヲ説明シテ居ル彼等ハ此偉大ナ侵蝕力ヲ以テ既ニ滿洲人ヲ融合同化シ殆ト自滅ノ域ニ至ラシメタソシテ將ニ南北滿洲ヲ喰ヒツクサウトシテ居タ然ルニ彼等ハ圖ラズモ其行先ニ幾ツカノ強敵ヲ發見シタノテアツタ彼等カ如ク困苦ニ耐ヘ粗食ニ甘ンシ孜々營々トシテ膨脹シテ行ク横合カラ之ヲ武斷的ニ壓迫シ去ラムトスル露西亞カ南下シタソシテ逐次侵略ノ歩ヲ進メテ來タノミナラス南カラハ弊衣破帽腕ト脚トヲ以テ土地ヲ墾キ田ヲ作り一步一步ト其同胞ノ地盤ヲ開イテ來ル鮮人ノ群ヲ見出シタノヲアル而モ其後ロニハ日本ト云フ後援者カ現ハレタ南ト北カラ押寄セル波ト東カラ進メテ行ク潮トカ衝突スル所茲ニ一大渦流ノ生スルハ已ムヲ得マイ固ヨリ此等ノ侵入者ニハ一長一失カアリ其力ニハ多大ノ差違カアルケレトモ其處ニ波紋ノ出來ルノハ當然ナル然ルニ彼等

0444

漢人ハ自國ノ領土ヲアリ微力ナカラモ自國官憲ノ背景ヲ持ツテ居ルノヲ利用シ奧地深クマテ喰ヒ入ツ
テ到ル處ニ山野ヲ開拓シ著々ト白蟻的侵蝕力ヲ發揮シタ高壓的手段ヲ以テ侵入シタ露西亞ニ對シテハ
其熱怖カ落チテ崩壊スルノ機會ヲ氣長ク待ツテ居タリシテ以テ夷征夷ノ方法ヲ用キ日本ト云フ強大ナ力
ヲ持ツテ之ヲ北方ニ驅逐シタ而モ其後革命ニヨル露國ノ弱點ニツケ込シテ其利權ヲハ殆ト舊狀ニマナ
回收シテ之ヲ壓縮シテシヤツタ、日本ニ對シテハ始メハ其威力ニ服スル様ナ態度ヲアツタカ其弱點ニ
乘スル機會ヲ捕捉スル事ハ決シテ忘レテ居ナカツタ斯クテ漢人ノ侵蝕力ハ遂ニ在滿邦人ヤ鮮人ニモ及
ヒ次第次第ニ彈壓ヲ加ヘ其發展ヲ妨碍セントスルニ至ツタ此事ハ固ヨリ昨日今日ノ問題ヲハナイカ近
來我對滿政策カ少シク積極的ニ傾イテ來ルノヲ見ルヤ彼等ノ反撥力ハ急ニ強大トナリ隨處ニ排日ヤ鮮
人壓迫ノ聲ヲ聞キ我カ内地人モ漸ク此處ニ注意ヲ拂フヤウニナツテ來タ此點ハ或意味カラ云ヘハ寧ロ
幸チアツタカモ知レナイ何トナレハ今日迄我同胞ノ大部分ハ其生存上滿蒙カ如何ナル價值ヲ持ツテ居
ルカト云フ事ヤ移住鮮人カ如何ナル狀態ニ置カレ我人口問題ノ解決ノ上ニ彼等鮮人カ如何程貢獻シテ
居ルカナトト云フ事ハ一ツモ知ラナカツタノカ此度ノ排日問題ヤ壓迫問題ヲ兎モ角モ一般カラ注視サ
レルヤウニナツタカラテアル固ヨリ我滿蒙開發ノ使命ヲ果ス爲ニハ其道ニ於テ先天的開拓力ニ富ム鮮
人ヲ以テ第一線トセネハナラズ然シ乍ラ鮮人ノ滿洲開拓ノ力ハ之ヲ漢人ノ偉大ナル侵蝕力ニ比フレハ
九牛ノ一毛ニモ過キナイノテアツテ此儘ニ放置スレハ何時カハ漢人ノ爲ニ征服セラレテシマフ運命ニ

在ルソレニモ拘ラス最近支那側ノ壓迫カ急ニ激烈ニナツテ來タノミカ我對滿蒙政策ノ積極的トナルニ
伴レテ此強壓ノ増加シテ行クノハ寔ニ皮肉ナ話デアル
斯ウシテ我人口問題解決ノ第一線ハ漢人侵蝕力ノ大波ノ爲ニ今ヤ九天直下元ノ國門、鴨綠兩江ノ線ニ
押戻サレントシテ居ルノミナラス青天白日旗ノ下ニ起ル利權回收ノ聲ハ我滿蒙ノ特殊權域ニマテ及ハ
ントシテ居ルノテアル今ニシテ我同胞カ此方面ノ實情ヲ明カニシ滿蒙ノ移リ行ク情勢ニ對シテ善處ス
ルト同時ニ鮮人ニ對スル支那側壓迫ノ狀態ニ眼ヲ注キ移住民支援ノ力ヲ竭ササルニ於テハ此狂瀾ヲ支
持スルコトハ到底出來ヌテアラウ此度ノ滿蒙問題ニヨツテ我上下ノ注意カ此處ニ注カレテ來タノハ國
家ノ大局ヨリ見ルトキハ勿論又シテモ在滿邦人ヤ鮮人ノ幸福テアツタ其結果トシテ急ニ滿蒙諸民族ノ
情況ヤ在滿鮮人ノ狀態ヲ知ラウトスル熱心ナ人モ増加シテ來タヤウデアル
本篇ハ此心持テ既ニ當部ニ於テ研究セル滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況ヤ在滿鮮人ノ狀態ヲ概括的ニ纏メ
テ見タノテアルカ各別個ニ作製シタ資料ヲ其儘遠カニ一括シタノテアルカラ内容ハ新舊カアリ粗密カ
アツテ出來上ツタモノヲ見ルト隔靴搔痒ノ感カ可ナリ多イカソレハ何レ最新ノ資料ト大方ノ指教トヲ
待ツテ訂正シタイ考テ居ル若シモ是ニ依テ滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況ト在滿邦人ヤ鮮人ノ模様カ臆氣
ニナリトモ知悉セラレ之ニ對スル同情カ一層深刻ニナルト共ニ我對滿蒙政策ノ上ニ何等カノ改善進歩
ヲ見ルヤウニナツタナラハソレハ誠ニ望外ノ幸デアル

第一篇 滿洲ニ於ケル諸民族ノ概況

第一章 諸民族滿洲侵入ノ沿革

第一節 滿洲ノ封禁

一、清朝封禁前ノ滿洲

近世ニ至ルマテ蠻界ノ域ヲ脱シ得カカツタ滿洲ニモ三皇五帝ノ昔カラ人類ノ足跡ハアツタノテアル其地固有ノ民族トシテハ古クハ濊貊等カアリ其後肅慎、女真等ノ部族カ現ハレテ金トカ遼トカ云フ國ヲ創設シタ事モアツタ然シ漢民族カ其地ニ足ヲ踏ミ入レタ歴史モ亦新ラシクハナイノテアル彼等ハ遠ク戰國時代ニ燕、齊等ノ國カラ遼東及長白山麓ノ三寶(人參ト貂皮ト烏臘草ト)ヲ得シカ爲ニ東漸シ漢ノ時代ニ至ツテハ其數益々増加シタ形跡カアル更ニ後世明朝ノ時代ニ於テハ遼東都司ノ開拓セル土地三百萬餘畝アリト傳ヘラレテ居ルカラ當時既ニ漢民族カ鋤ト鋤トヲ以テ滿洲民族ノ狩獵ノ地域ヲ逐次縮小サセテ居ツタ事カ推定サレル又一方ニ於テ彼等ト相前後シテ多數ノ鮮人カ江ヲ越エテ人參採掘ノ爲ニ北上スルモノカ多クソレヲ捕縛シタリ殺害シタリスル事カ遂ニ鮮滿部族ノ争鬭ヲ惹起シタ事カラ見ルト清朝カ滿洲ヲ封禁スル以前ニ於テモ各民族間ニ相當ノ葛藤カ行ハレテ居ツタ事ハ明カテアル

0447

二、滿洲ノ封禁

建州女眞ノ一部族カラ身ヲ起シテ遂ニ滿洲全土ヲ平定シタ清朝ノ祖愛暖覺努兒哈赤ハ滿洲ヲ以テ完全ニ滿洲人ノ滿洲ダラシメ其當時ニ於ケル唯一ノ財源タル人參ヤ貂皮ヲ其掌中ニ納メムトシタ其結果彼ハ清朝一貫ノ政策トシテ封禁ノ制ヲ施スノ意思ヲ遺シタノテアル然シ其完成ハ漸ク清朝四代ノ康熙皇帝(聖祖)ノ時ニ於テ實現シ得タヤウナ状態テアツタ今其封禁完成ニ至ルマテノ概要ヲ記シテ見ユ

努兒哈赤カ兵ヲ起シテ遼東ヲ侵シタノハ一五八三年ノ事テ我日本テ云ヘハ秀吉カ柴田勝家ヲ賤ヶ嶽ニ破ツタ年テアル又其長白山及鴨綠江一帶ノ地方ヲ平定シタノハ一五九一年ノコトテ丁度朝鮮征伐ニ出カケタ加藤清正カ敵ノ二王子ヲ捕ニシ其勢ヲ圖們江ヲ越エ間島マテ進入シタ年テアル斯クシテ

一六一六年ニハ 努兒哈赤皇帝太祖ト稱シ

一六一八年ニハ 撫順ヲ攻略シ

一六二五年ニハ 都ヲ瀋陽ニ定メタ

太祖ハ一六二六年饜麟堡ニ殂シタカ其遺志ハ太宗ニヨリテ繼カレ以後聖祖ノ代ニ至ルマテハ外征ノ範圍ヲ擴大スルト同時ニ滿洲ノ封禁ハ益々嚴重ニセラレタノテアル

一六三六年ニハ 大索國ヲ清ト號シ

一六三七年ニハ 朝鮮ヲ降伏セシメ

一六四四年ニハ 清兵山海關ヲ突破シテ完全ニ滿鮮ノ地ヲ統一シ益々封禁ヲ嚴ニシテ鮮人タルト漢

人タルトヲ問ハス界ヲ越エテ侵入スルモノハ斬罪ニ處スコトトシタ

一六四八年ニハ 外藩邊外地(蒙古界)ノ丈量ヲ開始シ蒙古人ノ侵入ヲ防キ山海關ニ於テハ嚴重ニ漢人ノ入滿ヲ取締ル事トシタ

一六八六年ニハ 露國東漸防止ノ爲ニ墨爾根及黑龍江地方ニ備へ

一六八九年ニハ 露國ト尼布楚條約ヲ締結シテ露國ノ入滿ヲ阻止シタ

一七一一年ニハ 滿鮮國境ニ於ケル封禁ヲ嚴ニセンカ爲ニ特ニ長白山頂ニ界碑ヲ建設シテ鮮滿ノ國境ヲ鴨綠江及土門江ト確定シ

此間明ヲ亡ホシテ支那四百餘州ヲ平定スルト同時ニ滿洲ノ封禁ハ愈々嚴ニシテシマツタノテアル而モ其封禁ノ爲ニハ實ニ四代ノ英傑ト略々一世紀間ノ年次ヲ要シタノテアルカソレテモ尙漢人ノ白蟻的侵蝕ハ其跡ヲ絶ツ事ハ出來ナカツタノテアル

三、滿洲人ノ其後

封禁後ノ滿洲人ハ滿洲ノ地カラ漢人ヤ鮮人ヲ排除シテ曠大ナル土地ヲ擁スルコトカ出來タ然シ其反面ニ於テ先天的開拓力ヲ有スル勞役者ヲ失ツタ爲ニ滿洲ニ於ケル農耕地ハ自然荒廢ニ歸セサルヲ得ナカ

ツタ同時ニ農ニ親シミ得サル彼等ハ私カニ漢人ヲ招イテ自己ノ土地ヲ開墾セシメ其利得ニヨリテ徒食スルノ惡習ヲ生シ漢人入滿ノ動機ヲ作ツタハカリテナク遂ニハ其爲ニ經濟的壓迫ヲ受ケ且其風俗ニ倣ヒ之ト雜婚スルモノナトカ出來タノテ漸次漢人ノ爲ニ同化セラレ現在ニ於テハ殆ト其跡方モナク僅カニ北滿洲ノ一部ニ其俤ヲ止ムルト云フ憐レナ狀態ニナツテ居ルノヲアル

第二節 漢人ノ入滿

一、漢人ノ侵蝕力

上古カラ近世ニ至ルマテ支那ノ周圍ニアツタ民族テ漢人征服ノ野心ヲ抱キ之ヲ征服シタモノハ少クナイカ其中原ニ入ツテ漢人ト接スルニ至ルヤ何時シカ其特色ヲ失ツテ遂ニハ漢人ノ色彩ニ包容セラレテシマハヌモノハナイノテアル一時ハ武斷的ニ漢人ヲ征服シテ之ヲ壓迫スルカ平和ノ戰ニ於テハ到底彼等ノ敵テハナイ星霜移ルニ伴レテ何時シカ昔ノ元氣ハ銷磨シ去リ不知不識ノ間ニ墮落シテ彼等ノ爲ニ融合同化セラレ自滅スルノ道程ヲ辿ルノテアル、アノ勢歐亞ヲ席卷シタ蒙古族カ夫レテアリ近世ニ於ケル滿洲人モ亦其例ニ洩レナイノテアル般鑑遠カラス漢民族ニ對シテ優越ナル事ヲ自負シ乍ラ彼等ト全正面ヲ展開シテ不用意ニ接近シツツアル現在ノ我日本民族モ亦戒ムヘキ所テハアルマイカ

二、滿洲人ニ對スル漢人ノ侵蝕

漢人ノ侵蝕力之ヲ個々別々ニ見ルトキハ眞個憐レムヘキ一個ノ流民ニ過キナイノテアル自己ニ防衛ス

へキ武力ナク背後ニ國家ノ聲援カナイ彼等ハ飄然トシテ滿洲ノ地ニ入り恰モ浮草ノ岸ニツクカ如クニ
滿人ノ佃戸(小作人)トナリ將來發展ノ基礎ヲ作ルノテアツタ

滿人ノ驕奢ニシテ農事ニ親シム事ノ出來ナイ所カ彼等ノ乘シ得へキ弱點テアツタ、漢人ハ此弱點ヲ知
ツテ先ツ下手ニ出テ頭ヲ低フシテ暫クハ辛苦ヲ忍ビ忠實無比滿人ノ利益トナル仕事モ自己ノ爲ノ仕事
ナルカ如クニ働イタソウシテ其地主ノ怠慢ト徒食カ愈々財ヲ散シ佃戸ニ對シテ納租(年貢)ノ前借ヲ敢
テスルノヲ待ツノテアツタ而モ其機會到ラハ彼等ハ之ヲ捕フルニ鈍重テハナイ忽チニ高利貸的手段ヲ
以テ之ニ對シ從來ノ態度ヲ急變シテ反對ニ地主ヲ威嚇シ實質上ノ地主トナリ更ニ其土地ヲ典受シテ此
處ニ牢固タル地盤ヲ築クニ到ツタノテアル

蓋シ此種背負投ケヲ喫セシムルノ方法ハ漢人ノ常套手段テアツテ到底滿洲人等ノ及フ處テハナカツタ
ノテアラウ

文獻ニヨレハ封禁ヲ施サレタル滿洲モ一八二七年ニハ禁ヲ破ツテ山海關ヲ通過スルモノ四千六百ヲ下
ラサリシト如何ニ彼等カ力強イ彈力ヲ以テ入滿シタカハ想像スルニ難クナイ後年滿洲ノ封禁制度撤廢
セラレ更ニ近代ニ於テ日、露ノ侵入ニヨリ滿洲ノ開發其緒ニ就クヤ彼等ハ老弱男女競フテ渡滿シ日、
露ノ勢力ヲモ侵蝕セントスル情勢ヲ示シテ居ル實ニ最近ニ於テ渡滿スル漢人ノ出稼者年々六十萬ニ達
スルト云ハレテ居ル

0451

斯クテ漢人ハ農ニ商ニ滿蒙到ル處ニ發展ノ根據ヲ作リテ滿洲人ヲ壓迫シ他民族ヲ排シテ勢拔クヘカラ
サルモノカアルノテアル

第三節 朝鮮人ノ滿洲侵入

一、鮮人ノ移住

一六三七年韓國ノ全土ハ清ノ爲ニ平定セラレ一七一一年ニハ長白山頂界碑ノ建設ニヨリ滿鮮ノ國境カ
劃定セラレテ鮮人ハ絶對ニ入滿スル事ヲ禁止セラレタカ而モ尙滿洲ノ處女地ヲ慕フテ江ヲ越エ竄入ス
ルモノ多ク一七八五年李朝正祖九年再ヒ鎖國令ヲ出シテ之ヲ嚴重ニ取締ル事トシタカ之ヲ絶對ニ防キ
止メル事ハ困難テアツタ一八四五年頃ニハ李朝ノ鎖國令モ漸ク廢弛シ爾來鮮人中封禁ヲ破ツテ渡滿ス
ルモノカ益々増加シタノミナラス遂ニハ封禁弛緩ニ乘シテ公然ト渡滿スルニ至ツタノテアル即チ其後
ノ概要ヲ記セハ

一八六九年ニハ 西鮮ニ凶歉アリシ爲飢饉ニ瀕セルモノ續々越境シタ

一八八〇年ニハ 朝鮮政府ハ越江禁止ノ制度ヲ撤廢シタル結果鮮人ハ公然ト渡滿シ

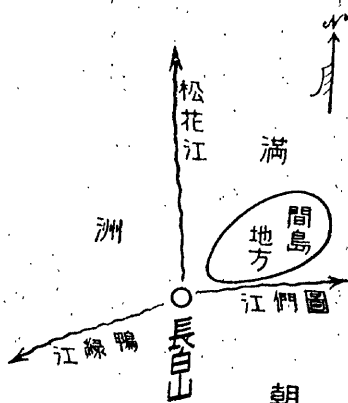
一八九七年ニハ 朝鮮政府ハ徐相燃ヲ西邊界管理司ニ任シ對岸一帶ノ鮮人ヲ保護セシメタ

斯クシテ其間支那トノ葛藤ハ免レナカツタカ兎ニ角鮮人ハ國家ノ背景モ自ラノ武力モ無クシテ單身湖
北ノ地ニ北ハ北ヘト漸次侵入シタソシテ既ニ古クカラ入滿シテ居タ漢民族ト衝突シ茲ニ各種ノ問題ヲ

惹起スルニ至ツタノテアル

二、鮮滿ノ國境問題

一七二一年康熙皇帝長白山蒙ノ水源地ヲ調査セシメテ長白山頂ニ界碑ヲ建テ記シテ鮮滿ノ國境ヲ西鴨
綠江、東土門江ト定メタノテアツタ多分其當時ニ於ケル鮮滿雙方ノ意思ハ固ヨリ鴨綠江及圖們江ヲ以
テ國境トナスニアツタノテアラウ然ルニ其後星霜久シク鮮人ノ多數カ圖們江對岸ノ間島地方ニ移住シ
タカラ茲ニ鮮滿國境ノ問題カ起ルヤウニナツタ、ツマリ朝鮮ハ間島ノ地方ニ多數ノ鮮人カ居住スルヲ



理由トシ界碑ニ所謂「土門江」トアルハ現在ノ圖們江ノ意ニア

ラスシテ松花江ノ上流ヲ意味スルノテアルカラ間島地方ハ朝

鮮ノ領土テアルト主張シ出シタノテアル

清朝カ朝鮮ヲ以テ保護國視シテ居タ間ハ其懸案モ大問題トモ

ナラスシテ經過シタカ韓國カ獨立國タル事カ明白トナリ更ニ

日露戦争後日本ノ保護國トナリ日韓合併トナツテカラ此問題

ハ日、清兩國ノ間ニ再燃スルニ至ツタノテアル

此問題ハ一九〇八年日清間島協約ノ成立ニヨリ圖們江及鴨綠江ヲ以テ國境トスル事ニ確定シ別ニ間島
特別區域ナルモノヲ設定シテ其區域内ニ於テハ鮮人ハ支那人ト同様ノ待遇ヲ受クルコトトナツテ解決

0453

スルニ至ツタカ固ヨリ鮮人ハ滿洲奥地深クマテ到ル處ニ侵入シテ居ルノテアルカラ是テ在滿鮮人ノ問題カ解決シ終ツタノテナイコトハ勿論テアル

三、最近ニ於ケル漢、鮮兩民族ノ争闘

漢人ノ特色ハ白蠶的侵入テ其武器ハ粗衣粗食テアル彼等ハ此特色アルカ故ニ幾度カ彼等ヲ高壓セル武斷的勢力ヲ驅逐スルコトカ出来タノテアル然ルニ鮮人ノ特色ハ又彼等ト酷似スル所カアリ其粗衣粗食ニ甘シ困苦缺乏ニ堪ヘ得ル事ハ漢人ニ劣ラナイノテアル此點ニ於テ鮮人ハ漢人ノ滿蒙發展上ノ一大強敵テアラネハナラヌ彼等兩民族ハ今ヤ滿洲ニ於テ白熱的争闘ヲ續ケテ居ル然シ現在ノ所漢人ト鮮人トヲ比較スルトキハ實ニ前者ハ後者ノ經濟的威壓者テアル其具體的實例ニ就テハ後編ニ述フルコトトスルモ茲ニ唯一言在滿鮮人ハ漢人ノ爲ニ有ラユル迫害ヲ受ケ其經濟的壓迫ニ苦シミツツアルコトヲ附言シテ置クコトトスル

第四節 露國ノ南下

露國ハ既ニ一五八〇年其探檢隊ヲ黑龍江ニ出シテ滿洲進出ノ機ヲ窺ツテ居タニモ拘ラス一六八九年ニ至ツテ清ノ聖祖ノ爲ニ尼布楚條約ノ締結ヲ餘儀ナクセラレ其後略々一世紀間ハ清朝ノ封禁政策ニヨツテ再ヒ黑龍江ニ臨ムヲ得ナカツタノテアル然シ其後封禁ノ弛緩スルニ及ヒ其隙ニ乘シテ漸次侵略ノ歩ヲ進ムルニ至ツタ其情況ヲ記セハ

0454

一七二七年ニハ、支那ト哈克圖條約ヲ締結シ貿易ノ爲ニ邊境ノ市場ヲ開放セシメ

一八五八年ニハ、愛理條約ヲ締結シテ黑龍江ノ利權ヲ獲得シ同年更ニ天津條約ヲ結ンテ烏蘇江東岸

地域ヲ侵略シタ

一八九六年ニハ、「カシニ」條約ヲ強要シテ北滿洲ニ於ケル鐵道ノ敷設權及冬季ニ於テ露國軍艦遼

東沿岸ノ諸灣ニ來航シ得ル權利ヲ獲得シ又露清銀行及東支鐵道會社ヲ創設シテ鐵

道敷設ニ著手シタ

一八九六年ニハ、關東州ノ租借並遼東半島南端ニ達スル鐵道ノ敷設權ヲ獲得シタノテアル

斯クシテ滿洲全土ヲ貫ク鐵道ノ敷設及關東州ノ租借ニヨリテ其進路ノ幹線ト侵略ノ根據トヲ確立シ遠

大且組織的計畫ヲ以テ南下シタノテアルカ近世ニ至ツテ日本ノ勃興ニヨリ日露戰爭ノ慘敗トナリ更ニ

革命ニヨル「ロマノフ」王朝ノ崩壞ト共ニ其滿洲ニ於ケル排他的既得權ハ悉ク支那側ノ回收スル所トナ

ツタノテアル斯クシテ露國ノ極東侵略ニモ一頓挫ヲ來スニ至ツタノテアル

然シ乍ラ吾人ハ革命後ニ於ケル露國民ノ勢力カ北滿ノ地ヨリ將ニ掃蕩セラレントスキニ當リ獨リ

彼ノ地ニ於テ勢力大ヲ爲スモノニ猶太人ノアル事ヲ看過スル事ハ出來マイ露國極東經倫ノ第一人者

「ウィット」伯ハ最初支那人カ先天的商才ニ富ミ善財ニ長スルニ著眼シ露國ノ極東進出ハ之ニ對抗シ得

ル猶太人ヲ以テ先鋒トナスニ如カストナシ彼等ノ極東移住ヲ極力獎勵助成シタト云ハレテ居ル爾來彼

0455

等ハ漢人ニ對抗シ困苦ト其競争トニ堪ヘ根ヲ北滿ノ地ニ張ツテ勳スヘカラサル地盤ヲ作り革命後ノ今日ニ於テモ尙勞農政府ノ支援ヲ得テ大ニ繁榮セルモノアリト稱セラレテ居ル蓋シ將來滿洲ニ於ケル民族爭鬪舞臺ノ一主演者タル事ハ豫想シ得ルコトアラウ
因ニ彼等ノ間ニハ國籍ヲ露國ヨリ英、米ニ轉シタルモノモ尠クナイカ其實質ノ猶太人テアル點ニ於テハ何等變化ハナイ

第五節 日本ノ進出

日本カ滿洲ニ勢力ヲ得タノハ實ニ日露戰爭以後ノ事テアル即チ一九〇五年日露ノ講和條約ニヨツテ南滿洲ニ於ケル利權ヲ繼承シテ以來滿鐵ヲ中心ニシテ各種ノ利權ヲ獲得シ其間米國野心ノ表現トモ見ルヘキ南滿鐵道買收問題、滿洲諸鐵道中立問題、錦愛鐵道問題アリ或ハ英商ノ野心、法庫門鐵道問題等ノ經緯モアツテ一時ハ滿洲ノ野ニ再ヒ暗雲低迷ヲ見ルニ至ツタカ手際ヨク之ヲ排除シテ南滿ノ地ニ牢固トシタ楔ヲ打チツケ更ニ西伯利出兵ヲ機會トシテ北滿方面ニモ伸展シテ金融上ノ一大勢力ヲ扶植シタノテアル
然シ乍ラ吾人ハ悲シムヘキ最近ノ一傾向ヲ提示セナケレハナラナイノハ遺憾ノ極テアル何ソヤ我日本民族ハ帝國行政權ノ及ハサル處ニ於テハ漢人等ニ對抗シテ其競争ニ打チ勝ツノ元氣ト能力トヲ有セサル事是テアル試ミニ左ノ數字ヲ見ヨ

0456

在滿邦人數

年次	支那行政區域			日本ノ行政區域		計
	商埠地	雜居地	未開放地	附屬地	關東州	
大正十一年	一九、六六六	三、一三九	二八五	六六、一七八	八二、一三二	一七一、三九九
同十二年	二二、八五七	三、一五九	二〇五	七二、八二七	八六、三〇〇	一七五、三四八
同十三年	二二、六六九	三、一九三	一七八	七九、六六七	八六、四九八	一八一、七〇五
同十四年	二一、九六〇	二、九七四	一八一	八二、三三一	九〇、五四二	一八七、九八八
昭和元年	二二、〇九六	二、八八七	一四〇	八四、八六九	九三、一八六	一九三、一七九
同二年	二二、三〇五	二、九四一	一四六	八六、七二四	九七、〇〇二	一九九、一〇八
増(+)減(-)ノ傾向	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)

在滿邦人口ハ年々増加ノ傾向ヲ有スルニ拘ラス我行政權ノ及ハサル商埠地、雜居地、未開放地等ニ於ケル邦人ノ人口ハ年々多少ノ増減ハアルトシテモ概シテ減少シテ居ル之ニ反シテ我行政權ノ保護下ニアル關東州並鐵道附屬地ニ於テハ年々増加スル點ヨリ見レハ邦人ハ漢人ノ爲ニ年々鐵道沿線ノ近クニ壓迫セラレツツアルコトヲ如實ニ物語ツテ居ルノテアル

0457

滿蒙ニ進出シタル我日本民族（朝鮮民族ヲ含ム）ハ如何ニシテ漢民族ノ浸蝕力ニ對抗セントスルカ蓋シ是レ最重要ナ問題テアラウ

第二章 滿洲ニ於ケル滿洲人ノ現狀

鋤ト鋤トヲ資本ニ滿蒙ニ進入シ恐ルヘキ勢力ヲ以テ歩々土地ヲ領有シ之ヲ拓キ疆ヲ其處ニ其子孫ノ永住地ヲ作ツテ行ク漢民族ノ底力ノ強サヨ見ヨ明治四十年ニハ奉天、吉林、黑龍江三省ヲ合シテ一千六百七十七萬八千七百人ノ人ヲ算セシ住民ハ昭和元年ニハ二千六百十三萬三千六百六十九人ニ達シ十九年間ニ約九百四十萬ノ増加ヲ示シテ居ルヲハナイカ而モ其増加ノ大部分ハ漢人ノ自然増加ト移民トナル統計ノ示ス所ニヨレハ彼等漢人ノ移住シ來リテ土著スルモノ入滿者ノ三十乃至五十分年々四十萬乃至五十萬ヲ算シテ居ルカ此一兩年山東、直隸、河南等ノ兵亂ハ著シク避難民ヲ増シ此等避難民ハ大部分滿洲ニ向フカ爲入滿總員ハ百萬以上ニ及フ程ナル此移住民ハ悉ク鋤ト鋤トヲ以テ滿洲ノ土地ヲ拓キ滿蒙人ノ土地ヲ領有シテ此處ニ新ナル漢人ノ天下ヲ造リツツアルノテアル

渤海金ノ昔ヲ論スルハ聊カ古メカシ彼ノ建州女眞ノ一部族ヨリ起ツテ遂ニ滿洲全土ヲ領有シ更ニ關ヲ越エテ中華ノ本土ニ入り支那全國ニ君臨スルニ至ツタ愛親覺羅ノ子孫其等ニ扈從シタ滿洲民族就中其發祥ノ地ヲ守ツタ滿人ハ今果シテ何處ニカアル彼偉大ナル漢民族ノ發展ノ下ニ次第々々ニ其土地ヲ失

ヒ戦々兢々一隅ニ逐ヒツメラレ大部分ハ同化セラレテ俗ヲ改メ姓ヲ易エ今ヤ其行衛ヲサヘ失ハントスルニ至ツテ居ル

滿洲民族ノ説明ヲ試ミルハ本稿ノ目的テハナイカ彼等ハ往昔金朝ヲ建テタ女眞 (Juchen Churchie) ト同族テ「ツングース」系中最モ進歩シタモノト云ハレテ居ル滿洲ナル名稱ニモ異説ハ少クナイカ是亦一般ニハ清室肇起ノ際西藏ノ達賴喇嘛ヨリ毎歲冊書ヲ献シ書中清王ニ對シテ曼殊師利大皇帝ノ稱ヲ用ヒタノカ基因テアルト云ハレル、曼殊師利ハ文殊菩薩テアルコトハ云フ迄モナク之カ轉シテ滿珠トナリ遂ニ滿洲ノ名カ起ツタト云フノタ

滿洲族ノ原住地ハ奉天省ノ北部及東北部、所謂邊外ノ地方ヨリ廣ク吉林、黑龍江ノ二省ニ互リ清室ノ祖先ノ如キハ今ノ奉天省興京方面ニ住ンテ居タ世祖順治帝入關シ帝都ヲ北京ニ奠ムルニ及ヒ滿洲民族亦之ニ隨テ支那本部ニ移住スルモノ多ク京畿一帶ハ勿論遠ク青州(山東)、西安(陝西)、南京(江蘇)、鎮江(同)、荊州(湖北)、成都(四川)、杭州(浙江)、乍浦(同)、廣州(廣東)等ニ駐防スルモノモ尠カラス尙熱河、歸化城、寧夏、新疆等ニモ派駐セシメラレ到ル處其裔孫ヲ見ルニ至ツタカ同時ニ彼等ハ漢人ノ風俗ニ化セラレ漢人ト雜婚スルモノモ生シ次第ニ其特色ヲ失フヤウニナツタ、清光緒末年(明治四十年頃)頃ノ駐防ノ状態ハ次ノヤウテアル

盛 京(奉天)

約一萬二千

0459

吉	吉林	約一萬三千
黑	龍江	約一萬二千
山	東省	約二千五百
山	西省 (歸化城綏遠ヲ含ミ)	約一萬
江	南 (南京鎮江方面)	約四千
福	建省	約三千
浙	江省	約二千
湖	廣 (荊州附近)	約七千
陝	西省	約七千
四	川省	約三千
廣	東省	約六千
直	隸省	約一萬
甘	肅省	約百
河	南省	約八百

此外新疆ニハ駐防兵約一萬五千アリ
 斯クテ滿洲ノ主人ハ所謂無底袋ト云フ支那本土ノ垣塙ノ裏ニ於テ三百年ノ間ニ全ク溶解サレテシマツ

タカ本場ノ滿洲ニ留守ヲ承ツタ滿洲人ハ如何ナツタカ是亦同様次第ハ漢人ノ侵蝕ヲ受ケル様ニナツタ
コトハ云フ迄モナイ

北京遷都ノ頃ニハ北京及其附近ニ在ツタ旗人八萬ト云ハレテ居タカ康熙時代ニハ十二萬ニ達シ其後戶
口ノ増加スルニ連レテ八旗ノ生活ハ漸ク困難ヲ告ケ之カ救濟策トシテ乾隆九年(一七四四年)北京朝廷
ハ京營八旗ノ散丁三千人ヲ吉林ノ拉林及阿勒楚喀ノ二地ニ送り農業ニ從事サセ様トシタ併シナカラ永
住ヲ喜ハヌ彼等ハ逃亡相次キ此植民ハ失敗ニ終ツタ後嘉慶十六年(一八一六年)又吉林地方カラ一千
名ノ旗人ヲ双城堡ニ送ツテ試墾サセタカ彼等ハ依然狩獵ヲ好ンテ農業ニ親シマス是亦失敗ニ終ツタハ
カリテナク在滿ノ滿人何レモ自ラ耕耘ヲナス私カニ漢人ヲ招テ自己ノ土地ヲ開墾サセ其利得ニヨツ
テ徒食スルノ惡習増大シ茲ニ却テ漢人侵入ノ動機ヲ作ルヤウニナツテシマツタ

奉天省、即チ南滿地方ハ早クカラ漢人カ流入シテ居タノテハアルカ、吉林、黑龍江ノ兩省ハ元來旗人
ノ所有即チ純然タル滿洲人ノ土地滿洲人ノ國デアツタ夫レヲ彼等ノ愚ナル自ラ耕シ自ラ生活スルコト
ヲ怠ツテ勤勉無比人知レヌ間ニ大殿堂ヲモ喰ヒ破ル底力ヲ持ツ白蟻ノ様ナ漢人ヲ好ンテ侵入セシメ遂
ニ今日ノ状態ニ陥ラシタノハ誠ニ自業自得ト云ハネハナラヌ

アノ兩省ヲ合シテ四萬九千方里ニ及フ廣地域ノ大部分ハ既ニ悉ク漢民族ノ土地ト化シタト云ツテ差支
ナイ滿人ハ今何レニ何ヲシテ居ルノテアラウ流石ニ發祥ノ地ト云フ寧古塔方面ノ一小局地テハ今モ其

勢力侮ルハカラサルモノカアツテ旗人ノ首領大德當主孟富德(曩ノ左翼協領吉林軍署最高顧問陸軍少將)ナトハ其地方ノ長官モ一籌ヲ輸スルト云ヒ阿城附近亦相當ノ根據カアルト云フケレトモ其他ハ何レモ漢人ニ壓セラレテ手モ足モ出ヌ状態ヲアル

滿洲ニ住ム滿洲人カ幾何カト云フ詳細ナ數字ヲ發見スルコトハ困難テアルソレハ支那ニ於ケル統計ノ不完全ナハカリテナク滿洲人其者カ近來全ク漢人ニ同化サレ征服サレテ易姓改俗其識別サヘ出來ヌ状態ニナリツツアル爲正確ニ兩者ヲ區別シテ戸口ヲ調査シ兼ネルノモ大キナ原因テアラネハナラヌ隨テ其概數ノ如キモ各説一致セス支那全省ヲ通シテ或ハ百八十萬ト云ヒ二百萬、三百萬乃至五百萬ト云ヒ多キハ滿洲ノミニテ七百萬ト稱スルモノモアルカ大體ニ於テ支那年鑑ノ奉天、吉林、黑龍江三省ヲ通シテ總人口ノ十分ノ一ニモ達セス状態トナスノハ眞ニ近イモノテハナカラウカ何トナレハ最モ旗人ノ根據ノ深ク今日テモ相當權力ヲ持ツト云ハレル寧古塔附近即チ寧安縣ニ於ケル調査ニ依レハ一九〇九年ニハ滿漢人數相匹敵セシモノカ一九一四年ニハ既ニ四分ノ一トナリ其後益々漢人ノ移住増加シ比率ハ更ニ減シアル模様ナレハ其他ハ推シテ知り得ヘク十分ノ一以下ト見ルカ妥當ニ近カラシ若シ然リトセハ昭和元年度ニ於ケル在滿支那人人口約二千六百萬ト見テ滿洲人ハ二百萬乃至三百萬トナル譯タ今稍々古キ資料ナカラ東支鐵道商業部カ發行シタ「北滿洲」中カラ各縣ニ於ケル滿洲人戸口ノ調査(一九一四年頃ノ資料)ヲ抽出シテ見ヨウ但シ爾來年ヲ閱スル十餘漢人ノ移住ハ年々數十萬ニ及フニ比シ

滿人ノ増加ハ微々タルモノテアルカラ現在兩者ノ差ハ茲ニ表ハスモノ以上ニ懸隔ノアルコトヲ覺悟セ
ネハナルマイ

(イ) 戶數、人口

		地主	借地人	人口
扶餘縣	漢人	一八、四九六 ^戶	二九、四三九 ^戶	三四〇、九六二 ^人
	滿洲人	一、四七二	九〇二	一四、〇三七
	蒙古人	八	一二四	八〇七
農安縣	漢人	一一、九五二	二二、八六八	四〇五、六八一
	滿洲人	四九	〇	四一〇
	蒙古人	八	一四四	九二八
長岑縣	漢人	三、六七七	一三、〇二三	九八、一九六
	滿洲人	四	〇	四一
	蒙古人	八三	三二二	二、五六六

(何レモ一九一四年縣知事調査)

(ロ) 阿城縣

當縣人口ノ大部分ハ滿洲人ニシテ農業ヲ營ミ漢人ハ僅少ヲ多クハ商業ニ従事シ北滿洲ヲ漢人ヨリ
モ滿人ノ多イノハ本縣ノミト云フノカ一九一八年頃ノ状態ヲアツタ土地ノ如キモ其頃ハ一七〇、

一七七畝ノ農耕適地中一一一、三六四畝カ滿人ノ所有テアツタト云フ

(ハ) 寧安縣

本縣ハモト滿洲中最モ滿洲人ノ多イ土地テアツタカ其後支那移民激增シテ

一九〇九年ノ調査テハ

滿 人 七、六八八戸

三六、一六二人

漢 人 六、二七二戸

二八、八五九人

即チ兩者相半ハスル景況ヲ示シタカ一九一四年ニハ滿人ハ漢人ノ四分ノ一トナリ爾後益々比率減少ノ模様テアル併シ流石ニ滿洲旗人ノ本場テアルタケ漢人モ旗人ニハ一日置カネハナラヌモノアリ彼寧海鐵道ノ創立者孫彥卿(昌圖人三十五年前來住)カ此鐵道問題ニ就テ前述ヘタ旗人ノ首領孟富徳ノ爲散々ナ目ニアツタ如キハ其間ノ消息ヲ語ルモノト云ハレテ居ル

(ニ) 双城縣

一九一四年頃ニハ縣内村落四百二十中滿人ノモノ百二十、漢人ノ村落三百テアツタ

(ホ) 海倫縣

本縣モ亦滿人多數ヲ占メテ居タノテアルカ一九一四年ニハ

漢 人 二四、三〇一戸

一七九、九七八人

滿 人

三、二一〇戸

二一、八五〇人

トナツテ居ル

(へ) 呼蘭附近

黒龍江省中最豊饒ノ處ヲ早クカラ移民ヲ見一八八七年既ニ今ノ呼蘭、蘭西、巴彥、木蘭四縣ヲ通シテ

漢 人

三〇、九二九戸

滿 人

五、五八五戸

トイフ數字ヲ示シテ居タ

彼等滿人ハカクテ其廣大ナル地域ヲ漢人ニ與ヘタハカリテナク其古來ノ風習ヲモ全ク漢人ノ文化ニヨ
リテ征服セラレ辨髮モ兩巴兒頭モ今ヤ次第ニ其姿ヲ沒セントシテ居ル

又彼ノ滿人ノ姓ハ漢人ト其趣ヲ異ニシ之ヲ哈拉ト稱ヘ哈拉ハ皆其祖先ノ起ツタ地名ヲ取ルノテアルカ
通例ハ此哈拉即チ姓ヲ稱セス漢譯シタ二字名ノ第一字(即チ那桐ノ那ノ如シ)ヲ以テ姓ニアラテ居タ
父子姓ヲ異ニスルカ如キハ此處ニ基ク然ルニ近頃ハソレサヘ漢人カラ繼子扱サレルノヲ怖レ王孟全
ナト漢人同様ノ姓ヲ名乗ルモノカ多イ曾テ露人ハ前述「北滿洲」ノ中ニ

古代當地方(扶餘)へ移住シタ滿洲人ノ後裔ハ從來漢字二字ヨリ成ル滿洲人特有ノ姓名ヲ附セルコト
ニヨリ僅ニ滿漢ノ區別ヲツケルコトカ出來タカ近來滿洲人モマタ漢人同様漢字三字カラ成ル姓名ヲ
附セルコトトナリ區別カ甚タ困難テアル

ト記シテ居ル

二四

其國語タル滿洲語ニ至ツテハ殆ト全滅ト稱シテモヨカルヘク唯地名汪清(窩集一城)、穆稜(毛憐一馬)、依蘭(三)等ニ其趾ヲ留メ言葉トシテハ寧古塔、三姓、黑龍江沿岸等ノ奥地ニ僅ニ餘命ヲ保ツテ居ルニ過キナイ滿洲文字モ亦今テハ唯詮索家ノ參考トシテ研究セラレルタケテアラウ

『滿洲人ハ何處』聲ヲ大ニシテ呼ンテ見テモ實際其反響カトレタケアルカハ極メテ覺東ナイ程ニ彼等ハ漢民族ニ包容セラレテシマツタ而シテ其龐大ナ領域ハ今ヤ漢民族ノ鋤ト鋤トニヨツテ殆ト全部侵略サレントシテ居ル否侵蝕サレテシマツタト云ツテモヨカラウ唯僅ニ彼等ト親戚關係ニ在ル朝鮮民族カ其土地ノ幾部分カヲ占有シテ開拓ヲ行ヒ漢民族ノ蠶食ニ相對抗シヨウトシテ居ルカソレサヘ近來連發スル支那人否漢人ノ鮮人壓迫ト云フ大脅威ヲ受ケテ下手ヲスレハ悉ク鴨綠江、圖們兩江ノ以南ニ押込マレントシテ居ルノタ嗚呼漢人侵蝕力ノ恐シキヨ昔康熙、乾隆ノ馬前ニ赫々タル武勳ヲ輝カシ四百餘州ヲ其馬ノ蹄ニ蹂躪シタ旗人ノ子孫、爾之ヲ何トカ見ル

第三章 鮮人及漢人渡滿ノ趨勢

朝鮮内地ノ生存ニ堪ヘ兼ネタ多數ノ鮮人カ安住ノ地ヲ求メムトシテ潮ノ如ク渡滿スルコトハ今後ト雖遽カニ止ミサウハナイ否益々増加スル許リテアルト見ネハナルマイ一方支那内地ノ騷亂ノ爲ニ衣食住ニ窮シテ四十萬乃至七十萬見當ノ漢人出嫁者カ入滿スルノモ亦例年ノ事テアル

0467

此二大潮流ノ消長ト其相互的關係ニ就テハ滿蒙ニ特殊關係ヲ有スル我帝國ノ慎重考慮ヲ要スル所テハアルマイカ此意味ニ於テ今統計ノ示ス所ニヨリ其勢ノ趨ク所ヲ推定シミヤウ

一、鮮人渡滿ノ趨勢及其移動

毎年ノ鮮人移住數ハ一萬ヨリ四萬ノ間ヲ往來シ其移住先ハ大體ニ於テ

間島地方 約四三%

鴨綠江對岸 約三七%

其他ノ方面 約二〇%

テアルカ尙之ヲ仔細ニ觀察スレハ左表ノ如ク

移住先	日韓合併大正九年マテ		自昭和正十年		總計	
	移住者概數	百分比	移住者概數	百分比	移住者概數	百分比
間島	八八千人	三九%	四〇千人	五五%	一二八千人	四三%
鴨綠江對岸地方	一〇〇	四四	一一二	一六	一一二	三七
其他滿洲各地	三九	一七	二一	二九	六〇	二〇
合計	二二七	一〇〇	七三	一〇〇	三〇〇	一〇〇

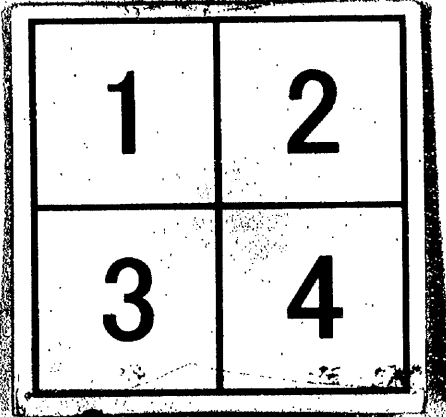
大正十年以後ニ於テハ鴨綠江對岸ヘノ移住者ハ逐次減少シ其他ノ方面カ増加シテ行ク傾カ見ユル更ニ在滿鮮人移動ノ情況ヲ見ルトキハ左表ノ如クテ

考備	移住地		大正十年末前後ノ人口	大正十五年人口	大正十年人口ヲ百トスル昭和元年ノ指數	増加率順位
	東部蒙古新開地方面	主要商埠地				
黒龍江一帯ニ在住スルモノ尠カラサルモ未タ統計的ノ數字ヲ得ルニ至ラス	東部蒙古新開地方面	附屬地内	八〇八	一、八六一	二三三	1
		附屬地外	五、四六三	九、九〇六	一八一	2
	吉林省各縣(除間島地方)		九、八八八	一八、三五〇	一八五	3
	滿鐵沿線各縣		二九、八四九	五二、七九一	一七六	4
	關東州		二〇、四一一	三三、三六二	一六三	5
	間島		六二五	九七三	一五五	6
	南滿洲中滿鐵沿道諸縣ヲ除キタル各縣		三〇七、八〇六	三五六、〇一六	一一五	7

大體ニ於テ

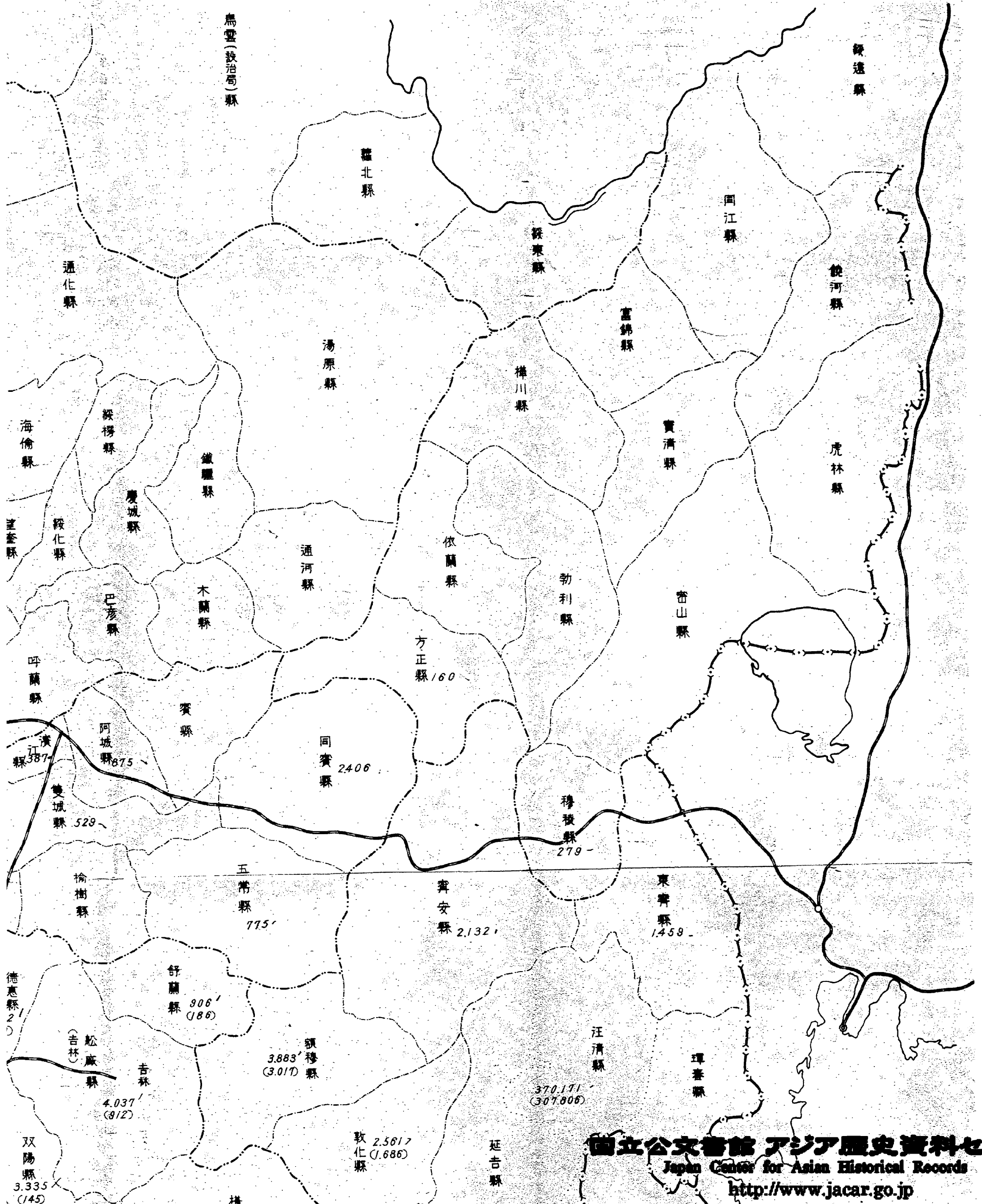
0469

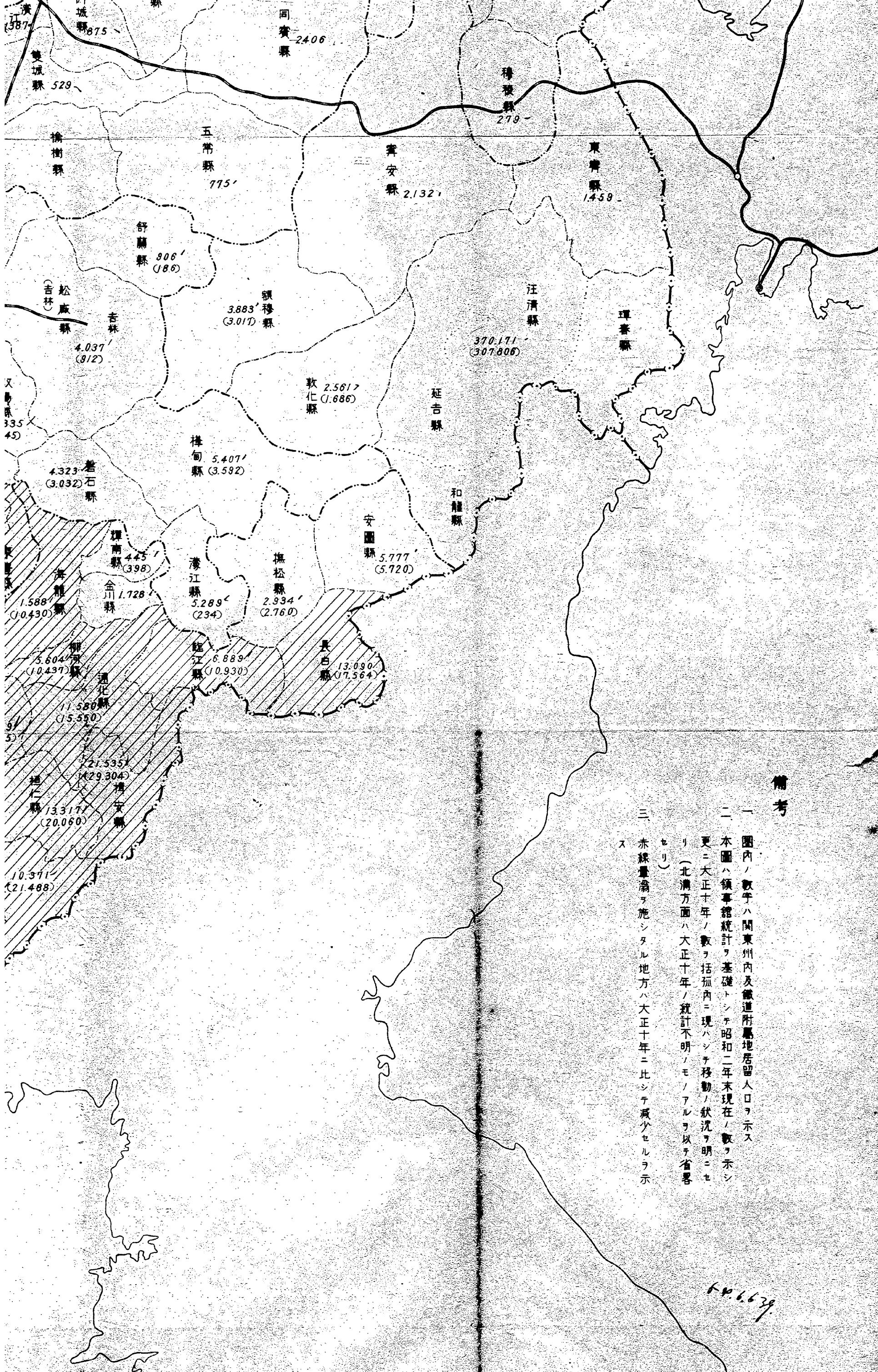
分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	在満鮮人移動状況図
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

0470
0471
0472
0473

在滿鮮人移動





備考

- 一 圏内ノ数字ハ関東州内及鐵道附屬地居留人口ヲ示ス
- 二 本圖ハ領事館統計ヲ基礎トシテ昭和二年末現在ノ數ヲ示シ更ニ大正十年ノ數ヲ括弧内ニ現ハシテ移動ノ狀況ヲ明ニセリ(北滿方面ハ大正十年ノ統計不明ノモノアルヲ以テ省畧セリ)
- 三 赤線量翁ヲ施シタル地方ハ大正十年ニ比シテ減少セルヲ示ス

トヨ. 6. 6. 39

1 南滿洲ニ於テハ關東州及滿鐵附屬地及鐵道沿線ノ諸縣ニ年々増加スルモ其他ノ地方特ニ鴨綠江對岸地方ハ著シク減少シツツナル

2 間島地方ハ依然増加シツツアルカ其増加率ハ舊時ニ及ハナイ蓋シ其移住數ノ最モ多イ點ナトカヲ見テ最早其方面ニハ開拓ノ餘地カ少イカラテアルト考ヘ得ル

3 東部蒙古新開地方面ハ最近ニ至ツテ特ニ増加シタ傾向カアル

要スルニ滿洲移住ノ鮮人數ハ年々増加スル一方テアツテ之ヲ移住先ニ就テ見レハ間島地方ハ數ニ於テ最モ多ク増加スルモ其率ハ舊時ニ及ハナイ又滿鐵沿線、蒙古及吉林以北方面ハ年々増加スル傾向カアル之ニ反シテ鴨綠江對岸東部奉天省方面ハ新移住者カ僅少テアルハカリテナク舊移住者モ他ノ方面ニ移動シテ減少スル一方テアル其原因ニ就テハ鴨綠江對岸方面ハ支那官憲ノ壓迫ト支那地主ノ酷薄カ他ノ地方ニ比シテ最モ激シイカラテアルト見ラレテ居ル

鮮人ノ新移住者テ山野ヲ開墾スルモノハ先ツ高イ利子テ漢人カラ金ヲ前借シタリ荒地ヲ借リタリスルソシテ此等ノ荒地ナリ山林ナリカ鮮人ノ働ト汗ニヨツテ綺麗ニ開墾サレテ沃野ト化スル頃ニハ鮮人ノ借金ニハ利子カ積リ積ツテ首カ廻ラナクナリ遂ニハ此等ノ開墾地ヲ手放シテ漢人ニ與ヘ他ニ移ラナケレハナラナクナルノテアル斯クシテ開墾シテハ漢人ニ取り上ケラレ開拓シテハ卷キ上ケラレテ北ヘ北ト流浪スル鮮人亦哀レナル哉テアル

二、滿洲ニ於ケル漢人移民ノ趨勢

漢人カ出稼者トシテ入滿スル經路ニハ大體ニ於テ二ツノ途カアル一ツハ支那鐵道ニヨリ奉天ニ入り各方面ニ至ルモノ、他ハ船路ニヨツテ大連、營口、安東等ニ到著シ奥地ニ至ルモノテアツテ兩者ノ比ハ一ト三トノ割合テアルト稱セラル

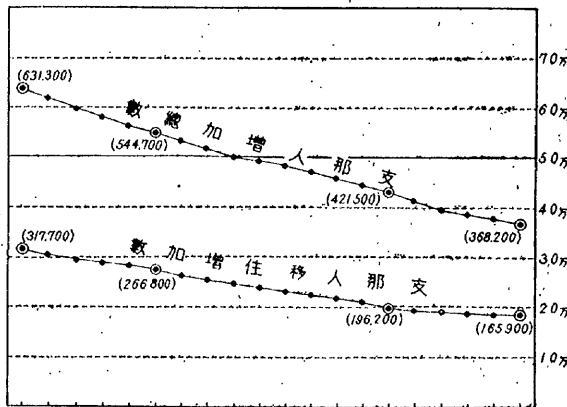
昭和二年一月カラ六月末マテノ半年間ノ統計ニヨレハ彼等入滿ノ模様ハ左ノ如キ狀態テアル

大連	上陸數	三三一千人
營口	上陸數	七五
安東	上陸數	二四
京奉線奉天驛下車數		九七
同 皇姑屯驛下車數		六七
京奉沿線下車數		三六
計		六三〇

次ニ滿洲ニ於ケル支那人人口ノ増加ハ逐年増加ノ率ヲ増シツツアルカ過去二十年間ニ於テ約九百七十五萬人ニ達シ其移民ニヨル増加數ハ四百七十萬人テ昭和元年度一年間ノ増加數六十三萬一千人、移民増加カ三十一萬七千人テアル之ヲ日本人ノ在滿邦人總數カ過去二十箇年モ掛ツテ僅々二十萬ヲ超エス年々増加スル數カ一萬ニモ達シ得ナイ點カラ見ルト實ニ月トすつばん程ノ相違カアル漢人出稼者ノ彈力亦恐ルヘキテハアルマイカ

0475

自昭和十四年十二月間至明治十四年止 滿洲支那人增加表



昭和十四年 昭和十三年 昭和十二年 昭和十一年 昭和十年 昭和九年 昭和八年 昭和七年 昭和六年 昭和五年 昭和四年 昭和三年 昭和二年 昭和元年 大正十四年 大正十三年 大正十二年 大正十一年 大正十年 大正九年 大正八年 大正七年 大正六年 大正五年 大正四年 大正三年 大正二年 大正元年 明治十四年

- 備考
- 一、昭和元年ニ於ケル全滿支那人人口ハ二千六百十三萬三千六百六十九人ナリ
 - 二、増加總數ハ移住増加數ト自然増加(出生死亡ノ差)トノ合計ナリ
 - 三、本表ハ關東州ノ統計ヲ基礎トシテ推算セルモノニシテ多少實際トノ差アルヲ免レス

三〇

0477

移住民ノ多クハ山東、直隸方面カラ來タモノテアルカ其土著スルモノ以外ニ多數ノ勞働者(苦力)ニシテ入滿スルモノ頗ル多ク之ヲ合算スルトキハ年平均四十五萬内外ノ入滿者カアルト稱セラレル特ニ最近支那内地就中山東方面ノ疲弊ハ著シキ爲移住及出稼者ノ數ヲ増シ昭和二年ノ入滿者ニ就テハ未タ確タル統計的數字ハナイカ百萬ヲ突破シテ居ル事タラウト云ハレテ居ル實ニ在滿漢人ノ激增推察ニ難クナイノテアル

斯クシテ潮ノ如ク押シ寄セル漢人ハ滿蒙到ル處ニ土著シテ邦人或ハ鮮人ノ行手ヲ遮リ形ノ如クニ侵略ノ魔手ヲ延ハシツツアルノテアル

第四章 滿洲ニ於ケル露西亞人

背後ニ強大ナ國家的威力ノアツタ露西亞人ハ革命勃發前マテハ小島ノ前ニ於ケル鷲ノ様ナ態度ヲ支那人ニ對シタソシテ自國ノ領土ヲ北滿ノ中央ニ延長シタヤウナ東支鐵道ヲ根據トシテ大國民ノ威ヲ振ツテ居タノテアツタ

左ノ類ヲ撲リ飛ハサレタ勢ヲ廻レ右ヲシタママ後ロヲ見カヘルコトモ出來ナイテ戻ツテ行カナケレハナラナイノカ曾テ露西亞人ニ對スル支那人ノ光景テアツタソレ程彼等露西亞人ハ威張ツテ居タノタ然シ今ハソレカマルテ正反對テアル東支鐵道ニ於ケル露國ノ利權ハ殆ト全部支那側ノ爲ニ回收セラレテ

シマツテ僅カニ其昔ノ倂ヲ殘スノミテアルカラ憐レムヘキテアル露西亞革命前ニ於テ哈爾濱ヲ旅行シタ者カ革命後ノ現在其地ヲ旅行シタナラ誰シモ支那人ノ勢ト露國人ノ悲シミ傳家店ノ勃興ト露西亞町ノ衰微ニ驚カサレナイモノハナイテアラウ

榮枯盛衰ハ世ノ習トハ云ヒ乍ラ茲ニモ亦漢人ノ侵蝕力ト其根強ヨサカ現ハレテ居ルノハ人ノ想像以上テアル同時ニ又露西亞人ノ衰レナ情況ニモ一滴ノ涙ナキヲ得マイ彼等ハ又シテモ支那官憲ノ爲ニ折ニ觸レ壓迫ヲ受ケテ居ルノテアル

革命前ニハ堂々ト運轉シテ居タ製粉工場ヤ木材工場ナトカ今ハ大キナ規模タケテ殘シテ休業シテ居ルノモ到ル處ニ見受ケラレル

赤化ノ勢力カ北滿洲ニモ進入シテ來タ時大商店カ其財産ノ安全ヲ保タンカ爲ニ早クモ其國籍ヲ英、米其他ノ強國ニ移シタノハマタシモ之ヲ閉鎖シテ安住ノ地ヲ求メントシテ求メ得ナイモノヤ赤露ノ魔手ヲ恐レテ一時遁レニ假寓シテ居タモノカ其儘行ク先モ見當カツカナイテ不安ナ生活ヲ送ツテ居ルモノ少クハナイ

革命當時ノ混亂ヨリ避難シテ其平和ノ日ヲ待ツ爲ニ「アルグシ」河流域ヤ海拉爾河ノ河岸ニ入ツテ狩獵生活ヲ爲シ母國ニ歸ル日ヲ待遠シカツテ居タ人々カ今ハ其歸リ得ルアテモナイノテ附近ニ於ケル不毛ノ土地ヲ開イテ種播キヲ始メタナト其強國民ノ末路亡國ノ哀レサヲ忍ハシメナイモノハナイ

0479

以下少シク此等露西亞人ノ人口ト其分布状態ニ就テ記シテ見ヨウ

大正十一年末ニ於ケル在滿露西亞人總數ハ九四、八三七人ヲ昭和二年末ニハ一四〇、五五四人ニ増加シ
 タノテアル其増加ノ理由ニ就テハ露國革命後ニ於ケル國籍得喪ナトノ關係カ明カテナイカラ判然タラ
 シムル事ハ出來ナイカ革命後ニ於ケル露領亦化ノ爲難ヲ支那領ニ避ケムトシタ避難民ヤ白色遁入兵カ
 多イ爲テアルト稱セラレテ居ル

在滿露西亞人ノ人口ハ滿洲ノ總人口約二千七百萬人ニ比フレハ僅々二百分ノ一ニモ達セナイカ北滿ニ
 於ケル外國人中人口テハ第一位ヲ占メテ居ル

滿蒙ニ於テ露人人口ノ最モ多イ居住地ハ哈爾濱及其附近テ彼等ノ商工業モ殆ト其地ニ集中セラレテ居
 ル

外務省調査ニ依レハ其分布状態ハ(昭和二年末各領事館管内人口)左ノ如ク

地方	人口	地方	人口
牛莊	四三	遼陽	二
奉天	一、二二三	安東	二
間島	六一	鐵嶺	二
鄭家屯	一一	長春	二、八九五

三三

都市名	戸数	人口	三内
吉林	七二	哈爾濱	一一〇、二四五
齊々哈爾	七、二七七	滿洲里	一八、六七二
赤蜂	八	滿洲合計	一四〇、二二三
關東州	三四一	計	一四〇、五五四
テ尙之ヲ主要都市ニ就テ見レハ左ノ如ク			
哈爾濱	一五、〇〇〇	五六、〇〇〇	
滿洲里	—	七、四〇〇	
海拉爾	—	四、五〇〇	
綏紛河站	八〇〇	三、八〇〇	
「ボクラニーチナヤ」	三〇〇	八〇〇	
一面坡	五〇〇	二、〇〇〇	
横道河子	六〇〇	二、二〇〇	
布哈圖	—	二、〇〇〇	
昂々溪	—	一、四〇〇	

滿洲鮮人五

0481

安 達

八〇〇

更ニ露國ト特種關係ニアツタ呼倫貝爾方面ニ就テ述フレハ左ノ如キ状態デアル

居住地方	部落數	戸數	人口
「アルグン」河流域	三〇	二〇二	一、〇二九
根 河	九	二〇二	一、一三〇
得爾分爾河	八	一五一	八六五
喀拉布河	四	二二	一三五
墨爾格勒河及海拉爾河	五	一八三	一、二一〇
錫尼克河	一	四〇	二五〇
計	五七	七九九	四、六一九

右ノ外沿線遠ク居住スルモノ或ハ蒙古旗内ニ入リテ取引ヲ爲スモノ等其數少クナイト云ハレテキル

第五章 滿蒙在住本邦人情況

第一節 人口統計上ノ種々相カラ見タ在滿邦人

一、邦人數

我國カ實際ニ滿蒙經營ニ著手シテカラ即チ明治三十八年以來ノ在滿邦人ノ數ハ左表ノ如ク

0482

在滿邦人累年增加表

年 度	商埠地	雜居地	未開放地	附屬地	關東州	計
明治三十八年	—	—	—	—	五,〇二五	五,〇二五
同 三十九年	—	—	—	三八二	一二,七九二	一六,六一三
同 四十年	—	—	—	一三,三一三	二四,五七二	三七,八八五
同 四十一年	—	—	九,四九一	一七,一六九	二九,七七三	五六,四三三
同 四十二年	—	—	一四,一九二	二一,八〇四	三二,一〇二	六八,〇九八
同 四十三年	—	—	一四,三九九	二五,二六六	三六,六六八	七六,三三三
同 四十四年	—	—	一四,七八三	二五,五〇〇	四一,二二四	八一,五〇七
大正元年	—	—	一五,八〇一	二七,八五三	四五,三一七	八八,九七一
同 二年	一五,四六二	—	一一,五三四	二〇,一〇一	四七,三五四	九四,四五二
同 三年	一五,〇二八	—	三,三六七	三三,四五〇	四八,九九〇	一〇〇,八三五
同 四年	一三,二八三	—	三,五一八	三四,五八四	五〇,一七六	一〇一,五八二
同 五年	一五,五三〇	—	四,一九四	三八,〇六八	五二,五九一	一一〇,三五二

0483

同	六年	一六、二二九			五、六三三	四二、八八二	五五、五二三	一一〇、一六〇
同	七年	一七、一〇一			六、六〇一	四六、八三八	六〇、〇二四	一三〇、五五九
同	八年	一八、二六九			五、三九六	五八、四九六	六五、三九七	一四七、五五八
同	九年	一九、七〇二			四、三一四	六二、一五一	七三、八九四	一六〇、〇六二
同	十年	一九、六四二			三、七七四	六五、四八四	七七、〇三八	一六五、九四二
同	十一年	一九、六六六	三、一三九		二八五	六六、一七八	八二、一三一	一七一、三九九
同	十二年	二二、八五七	三、一五九		二〇五	七二、八二七	八六、三〇〇	一七五、三四八
同	十三年	二二、一六九	三、一九三		一七八	七九、六六七	八六、四九八	一八一、七〇五
同	十四年	一一、九六〇	二、九七四		一八一	八二、三三一	九〇、五四二	一八七、九八八
昭和元年		二二、〇九六	二、八八七		一四〇	八四、八六九	九三、一八七	一九三、一七九
同	二年	二二、三〇五	二、九四一		一四六	八六、七一四	九七、〇〇一	一九九、一〇八

備 但シ明治三十八年ハ關東州ノミノ数字ナリ、明治四十一年末以前ハ領事館管内ヲ缺除
考 ス、大正十二年度ニ於テ商埠地ノ人口前年ニ比シ激減シタルハ從來ノ安東及牛莊ノ商
埠地ノ一部カ大正十二年十月鐵道附屬地ニ編入セラレタ結果ナリ

昭和二年末現在ハ總數十九萬九千八百八人ニシテ明治四十二年末ノ約二・九倍ニナツテ居ル